

岩佐新と石橋コレクション

田所夏子

岩佐新（1894-1973、fig.1）は、石橋正二郎（1889-1976）のコレクション形成に重要な役割を果たした人物である¹⁾。もともとは画家志望であったが、戦前は美術ジャーナリストとしていくつもの雑誌で活躍していた。その後正二郎と出会い、生涯を通じてコレクション収集の助言や管理、そして美術館活動に貢献した。また藤島武二と親しく、正二郎との仲介役を果たしたのも岩佐であった。《黒扇》（fig.2）などの代表作を含む藤島の多くの作品が正二郎の手に渡ったのは岩佐の功績によるところが大きい。そこで本稿では、これまであまり調べられてこなかった岩佐の人物像と、石橋コレクションとの関わりを明らかにしたい。

1. 画家として

岩佐新は1894（明治27）年7月10日、島根県能義郡伯太町井尻（現在の安来市）に生まれた²⁾。県立松江商業学校を卒業後、東京に出て石井林響（1884-1930）に師事し日本画を学んだ³⁾。林響は千葉県出身の日本画家で、橋本雅邦に師事し文展や帝展で活躍しながらも、脳溢血で倒れ47歳の若さで世を去った。はじめ天風と号していたが、文展から帝展にかわった1919（大正8）年に、林響と改号している。改号にあたっては、岩佐ら門人たち

が「林響」という語を発案した。岩佐が内弟子として林響に入門したのは、まだ天風と名乗り品川に居を構えていた1914（大正3）年のことであった⁴⁾。林響が1925（大正14）年に郷里に近い上総の大網に移ってからは遠方となり、岩佐の雑誌の仕事が忙しくなったこともあって次第に疎遠になっていったという。岩佐は当初日本画を学んでいたが、同時に油絵も描いていた。しかし林響から「西洋画を描く人は気の毒だ、物を見なければ描けないのだから」と言われ、大いに反発し遠ざかったこともあったと回想している。もともと、林響自身もともと洋画家を志しており、その影響もあってか、岩佐はその後洋画に転向し岡田三郎助が指導する本郷洋画研究所に学んだ⁵⁾。

1928（昭和3）年には、第5回槐樹社展に一般出品者として油彩画《夜の静物》を出している⁶⁾。その後も第6回展に《広場風景》、第7回展に《庭》、第8回展に《O氏像》（fig.3）と、毎年続けて出品している。また、帝展にも1930（昭和5）年の第11回展と、翌年第12回展に入選した。第11回展に出品した作品《窓》（fig.4）は、果物やカップの置かれたテーブルと、椅子、食卓用のペンダントライ



fig.1
岩佐新（1942年撮影）



fig.2
藤島武二《黒扇》1908-09年、石橋財団ブリヂストン美術館

トが配された室内から、窓越しに外の草花や木々の葉が見えている作品である。「気持ちのいい作だ。私は初めて此作者の絵を見るので、今迄知らなかったが、此人に此芸ありて驚いた」と、小林徳三郎により評された⁷⁾。第12回展の出品作《椅子に凭れるO氏像》(fig.5)は、おそらく第8回槐樹社展に出品した作品と同じモデルを描いたものである。スーツ姿の男が椅子に腰かけている肖像画で、男が右手に持っている煙草からは一筋の煙がたち上っている。人物の顔立ちはややデフォルメされ、ユーモラスな表情を見せている。

およそ4年ほどの短い期間に洋画家として順調にキャリアを積んでいた岩佐だが、次第に雑誌編集者としての仕事が忙しくなり、第12回帝展出品以降は画家としての活動は影を潜める。1940(昭和15)年11月と1942(昭和17)年4月に銀座の場

居堂で水墨画の個展を開いているが⁸⁾、そのほかに目立った出品の記録は見受けられない。

2. 美術ジャーナリストとして

洋画家として展覧会に出品する一方、美術雑誌の記者、編集者としても能力を発揮した。その仕事ぶりは「戦前はみづゑの大下(藤次郎[筆者註])さんや三彩の藤本(韶三[同])さんと並んで活躍した代表的美術ジャーナリストであった」と称されるほどであった⁹⁾。岩佐が編集に携わった美術雑誌としては、『美術新論』、『美術』、『国民美術』などが知られている。いずれも戦時中の出版統制のため改題を余儀なくされたものである。『美術新論』には1926(大正15)年の創刊から関わり、自ら精力的に記事を書いて掲載した。執筆した記事の内容は、自身が深く傾倒した石井林響や藤島武二についてだけでなく、さまざまな展覧会評や、美術界、批評家たちへの提言など幅広く目を配っている。『美術新論』は斎藤与里、牧野虎雄、熊岡美彦ら槐樹社の同人たちが編集をおこなう月刊誌で、岩佐は当初実務担当者として参加していた。岩佐が槐樹社展に出品したのは1928(昭和3)年の第5回展からであったことから、槐樹社との関わりは雑誌編集の仕事が最初であったようである。しかし10年ほどで槐樹社は解散し、『美術新論』は第8巻第2号(1933(昭和8)年2月号)からは東光会に引き継がれ、同年11月号から『美術』と改題した¹⁰⁾。このとき編集の中心となったのは斎藤、熊岡と岩佐であった。その後日中戦争の影響もあ

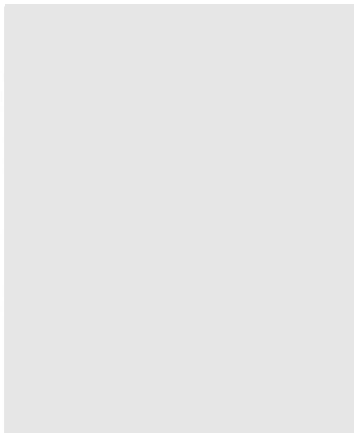


fig.3
岩佐新《O氏像》1931年

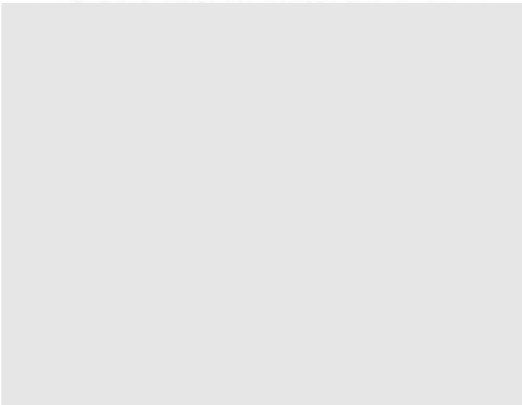


fig.4
岩佐新《窓》1930年

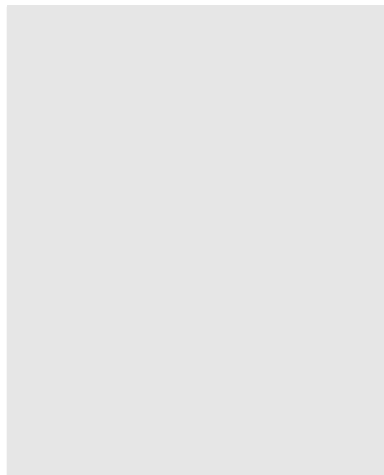


fig.5
岩佐新《椅子に凭れるO氏像》1931年

って経営が次第にきびしくなり、1938（昭和13）年1月号からは岩佐個人が経営を引き受けることになった。有島生馬の計らいで川崎銀行から資金援助を受けたものの、戦況悪化にともないさらに経営が苦しくなっていたところへ、軍部からの出版統制にあった。ちょうどそのころ、画商として成功をおさめていた青樹社の鈴木里一郎から声がかかり、美術評論家の荒城季夫を加えた3人で「国民美術社」を結成し、雑誌『国民美術』を創刊した。しかし統制下における紙の配給許可がおりず、1941（昭和16）年10月に創刊号を発行したのち、翌年2月号をもって廃刊をむかえた¹¹⁾。その後戦争中は、疎開先の島根で雑誌『島根美術』の創刊に関わったが、ほどなくして再び上京してからは雑誌編集の仕事からは遠ざかっていったようである。

およそ20年に及ぶ編集者としての仕事を通して、岩佐は非常に多くの知見と人脈を得ることになった。そのことを端的に示すひとつの事例が、近代美術館設立運動である。その運動は、1937（昭和12）年、1939（昭和14）年、そして1950（昭和25）年と3度に渡った¹²⁾。1度目は紀元2600年を記念して計画された万国博覧会の会場を美術館として残せるものになろうとする運動であったが、結局万博自体が実現せず美術館設立の話も立ち消えになった。東京府美術館を「大衆観覧者を対象とする展覧会場としては、地の利を得ざるのみならず、その構造に於いても適当ならず」として、その役割を常設美術館とする代わりに、丸の内付近に展覧会場を新たに設立する運動の実行委員会の1人に名を挙げている¹³⁾。

2度目は、「明治大正名作展覧会」の開催をきっかけに、皇太子殿下生誕記念事業の一環として美術館建設を計画したものであった。この時は資金集めや土地探しなどかなり具体的に進んでいたにもかかわらず、戦争が始まったことによって実現に至らなかった。岩佐は雑誌『美術界』を主宰していた浦崎永錫らとともに方々を駆け回り、当時の東京市長や横山大観、和田英作、朝倉文夫などの美術界の重鎮、東京美術学校の校長、経済界からは藤山愛一郎などの協力を得た大プロジェクトであった。

3度目は、1950（昭和25）年に日本美術家連盟から建議文を提出し行政に働きかけたものである。当時連盟の二代目事務局長を務めていた岩佐も、依頼されて参議院で直接近代美術館の必要性を説き、翌年には文部省の積極的な働きかけにより予算案が国会を通過した。ところが日比谷公園を有力候補としていた建設用地の問題などで美術館建

物の新築が難しくなってしまった。そしてその翌年、京橋の旧日活会館を前川国男の改装によって使用することがようやく決まった。

この一連の運動に深く関わっていた岩佐の、関係者との人脈や実現に向けた行動力には眼をみはるものがある。そののち、石橋正二郎が1969（昭和44）年の東京国立近代美術館の移転新築に際し建物を寄贈したことは、岩佐にとっても積年の思いが叶った瞬間でもあっただろう。

3. 藤島武二との因縁

つぎに、岩佐の生涯を語る上で欠くことのできない重要な人物のひとりとして、藤島武二（1867-1943）との交流について紹介したい。以下は岩佐自身による回想である¹⁴⁾。

因縁という言葉があるが、藤島先生と私とはその因縁というのかもしれない。亡くなられた朝も（昭和十八年三月十九日）、なにか先生に呼ばれているような夢を見て、気にかかるので急いで自宅にうかがったら「今朝はなんだか先生の様子がおかしい」との話、諸方へ電話してしらせているうちにとうとういけなかった。それから御葬儀のことその他、相当立入ってお手伝いすることになってしまった。私は先生の門人というわけではなかったが、絵のこともいろいろと教えて頂いた。「ちかごろ何か描きましたか」などとよくいわれた。禅の話、老子の話なども伺ったが、凡才は何等ものにならぬ。展覧会も御生前に三越での新作展のお世話をし、その後朝日新聞社主催の遺作展、またこんどの毎日新聞社の藤島展にも関係するようになった。どういうお考えだったかわからぬが、御病中お床についてられるころは、先生の日本画など見てもらいに来ると、私に箱書をしておけといわれ、よく極書を書いたものだ。今となっては正当のお弟子の先生方も居られることだから、そういうことはなるべくしないことにしている。

岩佐がかつて本郷洋画研究所に学んでいた頃には、すでに藤島は川端画学校に移っており、2人がいつ頃どのようにして知り合ったかは詳らかでない。しかし『美術新論』（第4巻第12号）では、「アトリエ訪問記」という連載記事で本郷の自宅にいる藤島を取材している。取材当時、藤島は皇太后陛下御献上品として岡田三郎助とともに依頼された天皇の御居間を飾る絵を制作中であった。担当

記者名は「S.1生」となっており、記事のなかで記者は以前にも何度か藤島邸を訪れたことがあるように書かれている。もしもこれが岩佐本人によるものであれば、少なくとも記事が出た1929（昭和4）年の12月より前から藤島とは面識があったことになる¹⁵⁾。また、1934（昭和9）年には岩佐が編集した藤島の生前最初の画集が出版されている。1938（昭和13）年12月の日本橋三越における「藤島武二近作画展」では世話人として開催を手伝い、1942（昭和17）年11月には「藤島武二作品鑑賞会」（日本橋三越）開催準備にも奔走している。この展覧会は、有島生馬、伊原宇三郎、猪熊弦一郎、長谷川仁らとともに藤島武二画集刊行会を発足し準備していたなかで発案されたもので、藤島自身の監修のもと58点が展示された。しかし画集が刊行されたのは翌年11月のことで、藤島はその完成を見ることなく3月に亡くなり、結果として没後最初の本格的な画集となった。先に紹介したとおり岩佐は藤島の門人ではなかったが、公私に渡って親しく交流し、その画業の顕彰だけでなく身のまわりのことまで細やかに支えた。十数年におよぶ2人の交友を通して岩佐がまとめた「藤島武二語録」は、直接談話や諸誌上から集めた語録の一部であり、その後の藤島研究に欠かせない重要な証言記録のひとつとなっている¹⁶⁾。

4. 石橋正二郎との出会い

岩佐は、戦前に青樹社の鈴木里一郎を通じて正二郎と知り合ったとされている¹⁷⁾。青樹社は、1939（昭和14）年11月に銀座本店で「青木繁遺作展覧会」を開催した。このとき青木の友人であった梅野満雄が所蔵していた青木の作品64点が公開され、《海の幸》、《わだつみのいろこの宮》など出品作の一部がその後正二郎の手に渡った。正二郎は、東京に仮住まいしていた1935（昭和10）年頃から青樹社を訪れ、鈴木と懇意になっていた。岩佐と鈴木がいつ頃から知り合っていたかは分からないが、先に述べたとおり1941（昭和16）年には鈴木の声かけにより雑誌『国民美術』を創刊、発行していることから、遅くともそれ以前には面識があったものと思われる¹⁸⁾。鈴木の仲介により正二郎と出会った岩佐は、とくに、正二郎が藤島邸を訪問するにあたり大きな役割を果たした。以下に、藤島との出会いについて語った正二郎の回想を紹介したい¹⁹⁾。

藤島さんに私が初めて会ったのは、ちょうど三十年前（1938）、東京・日本橋の三越で個

展が開かれている時だった。何点か並べられている絵のなかで特に私を引きつけた絵があった。《浪（大洗）》という題だったが、筆勢が強く色彩も豊かで、重厚な感じのする作品だった。そこでさっそく藤島さんにゆずっていただきたいと申し入れたのだが、即座に断られてしまった。藤島さん自身も気に入っているからということである。が、断られればよけい手に入れたくなるのがコレクター心理である。人を通じて何回となく藤島さんに申し入れ、やっとのことでその絵を手に入れることができた。これが機縁で私は藤島さんと親しくなり月に一回は藤島さんのお宅にたずねるようになったのである。もちろんそれ以前から藤島さんの絵には興味があった。だが藤島さんの人を知ることになって、前にもましてその芸術の偉大さを知ることになったのだ。

このとき展覧会の世話役をつとめたのが岩佐であったことから、正二郎と藤島との関係を仲介したのは岩佐だったと考えて間違いなく、正二郎と岩佐が知り合ったのは1935～38年の間である可能性が高い。1942（昭和17）年には、《黒扇》の前で藤島と正二郎、長男幹一郎と岩佐が並んでいる写真が残されている（fig.6）。また、晩年藤島が病床に伏せていた頃には、ヨーロッパ留学時代の滞欧作15点ほどが散逸するのは惜しいからと正二郎に買い取ってもらった。ところが3日ほどしてからあの絵がないと寂しくて寝られないから返してほしいと言われ、気分を害するどころか画家の自分の作品への執着に感動した正二郎は、ただちに返却している。それらの作品はその後ふたたび



fig.6
左から岩佐新、藤島武二、石橋正二郎、幹一郎（1942年撮影）

正二郎のもとに戻った。こうしたエピソードから《黒扇》をはじめ藤島の滞欧作の多くを正二郎が入手することとなった背景には、画家とコレクターとのあいだに深い信頼関係が築かれていたことがうかがわれる。そしてそんな両者の仲介役として、「早くから石橋正二郎さんに藤島武二先生の作をお勧めしていたが、特に先生の没後はその作品の散逸を恐れ、手に入る限りのものを集めた」岩佐の功績は大きかった²⁰⁾。

また、岩佐は正二郎が特別な思い入れをもっていたとされるピカソ《女の顔》(1923年、石橋財団ブリヂストン美術館)を入手する際にも、重要な役割を果たしたと思われる。この作品は福島繁太郎の旧蔵作品で、正二郎がもともと欲しくてたまらず、購入の話が出た時に即決したものである²¹⁾。正二郎が作品を入手したのは終戦後まもなく、ちょうど西洋絵画の収集を本格的に開始したばかりの頃であった。岩佐は1944年から郷里島根に疎開してこの時期ちょうど一時的に正二郎のもとを離れていた。しかし、戦前からたびたび雑誌で福島コレクションを取材していたこともあって、《女の顔》に関する多くの情報と関係者の人脈を正二郎に提供したことだろう。事実、岩佐が編集をつとめた美術雑誌ではたびたび福島コレクションの特集が組まれており、なかでも『美術新論』では日本でいち早く福島コレクションを紹介し、《女の顔》の図版が大きく掲載された²²⁾。正二郎が西洋絵画の収集を開始した矢先、絶好のタイミングでこの作品を入手することになった経緯に、岩佐の存在が影響していた可能性は高い。正二郎と親しかった猪熊弦一郎の回想によると、旧福島

コレクションの「ルオーの顔の丸い婦人の絵」(おそらくルオー《ピエロ》1925年、石橋財団ブリヂストン美術館)の購入に際しても、正二郎の主な相談相手となっていたのは岩佐新であったという²³⁾。

5. コレクション管理人として

こうして正二郎の厚い信頼を得た岩佐は、コレクション管理人および助言者として初期の収集に深く関わることとなった。周囲からも「石橋さんを美術の大愛好家たらしめ、個人のものとしては世界的な美術館を作り上げた岩佐さんの陰の功績は非常に大きい」と語られるほどであった²⁴⁾。正二郎は、1951(昭和26)年には自身のコレクションを保管するため自宅の敷地内に倉庫を建築している。「美術庫」と呼ばれたこの倉庫には収集した多くの美術品が保管され、いつしか国内外から噂を聞きつけた画家や愛好家、学者等から見学を希望されることが少なくなかったという²⁵⁾。美術庫が完成した年の11月には、美術に造形が深くニューヨーク近代美術館の理事も務めたブランシェット・ロックフェラー(ジョン・D・ロックフェラー三世夫人)の訪問を受け、岩佐も案内役のひとりとして同席している(fig.7)。

翌年1952(昭和27)年1月にブリヂストン美術館が開館してからは、岩佐は主事として美術館におけるさまざまな実務を担当することになった²⁶⁾。具体的にはコレクションの管理に加え、展覧会の準備や作品輸送作業の監督、講演会の手配などで、時には自ら講演をおこなうこともあり、その仕事ぶりは学芸員そのものである²⁷⁾。また、開館の翌年から石橋幹一郎を委員長とする「映画委員会」が立ち上がり、岩佐はここでも主事に就任している。映画委員会は、1964年までに16本の記録映画を制作した。映画は梅原龍三郎や川合玉堂、高村光太郎ら約60人の作家のアトリエを訪れ、制作中の様子や日常の姿を撮影したもので、貴重な記録資料となっている²⁸⁾。

ところで、当館には岩佐による模写作品が所蔵されている。マネ《メリー・ローラン》の模写、ピカソ《裸婦》の模写、ピカソ《アルルカン》の模写、和田英作《富士》の模写の4点である。そのうち当館が原画を所蔵しているのはマネ《メリー・ローラン》のみで、裏板には「マナー「メリー・ローラン」/調査に依る復元模写/岩佐新」と書込みがある。ピカソ《アルルカン》の模写(fig.8)の原画は福島繁太郎の旧蔵品で、現在はスペインのティッセン・ボルネミッサ美術館に所蔵され

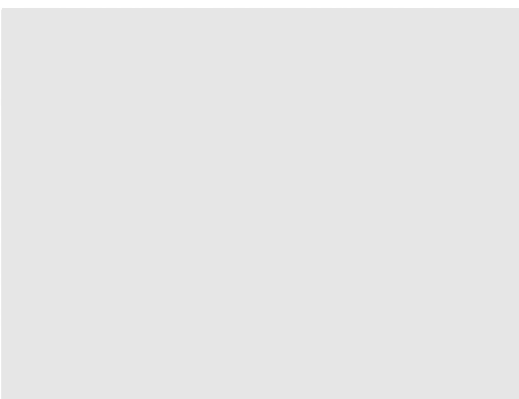


fig.7
左から團伊能、同夫人、ロックフェラー三世夫人、矢代幸雄、石橋昌子(正二郎の妻)、正二郎、岩佐新(麻布永坂の自邸、1951年11月撮影)

ている。裏面の木枠には、[贈ブリヂストン美術館 / ピカソ「アルルカン」岩佐新模写]と書かれている。いずれも模写した目的や時期は不明だが、裏面の書込みから想像すると1952（昭和27）年のブリヂストン美術館開館後に、何らかの調査のために制作されたものと思われる。美術館における岩佐の仕事は、学芸員的な内容にとどまらず映画製作や模写制作など多岐に渡った。そのいずれも過去に画家として活動していたことや、美術ジャーナリストとして多彩な人脈を培ったことが、バックグラウンドとしていかに有効に働いたかは容易に想像がつく。こうして岩佐は亡くなる2年前まで、ブリヂストン美術館に参与として席を置き、文字通り生涯を尽くして貢献した。

戦争でひとり息子を亡くし、晩年の岩佐は病気をしたり妻に先立たれたりとした気の毒な身の上であったようだが、元来明朗な人柄で、広く誰からも親しまれたという²⁹⁾。1973（昭和48）年6月20日に78歳で亡くなり、23日には増上寺で美術館葬が執りおこなわれた³⁰⁾。

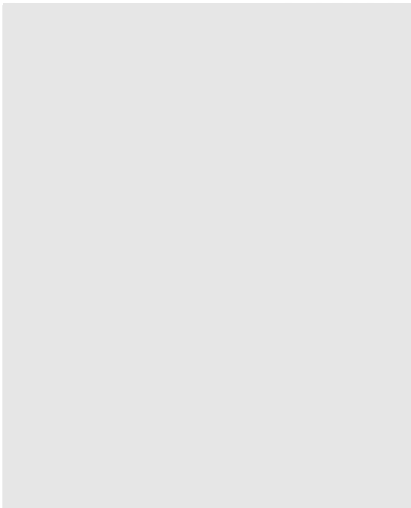


fig.8
岩佐新《ピカソ「アルルカン」の模写》

註

- 1) 原田直次郎と親交のあった医師で貴族院議員の岩佐新（あらた）（1865－1938）は、別人である。
- 2) 『島根県大百科事典』山陰中央新報社、1982年、p.160。
- 3) 石井林響については、主に以下の文献を参照した。
 - ・岩佐新「石井さんの憶ひ出（林響氏追悼）」『アトリエ』第7巻4号、1930年4月、p.132-134。
 - ・岩佐新「林響」『美術』（石井林響供養号）第14巻第5号、1939年、p.10。
 - ・「石井林響」『近代日本美術事典』講談社、1989年、p.29。
- 4) 岩佐新「石井林響」『三彩』1957年10月、p.41-43
- 5) 伊原宇三郎「岩佐新さんを悼む」『連盟ニュース』224号、1973年7月、p.2。
- 6) 松島光秋「槐樹社の画家たち（二）」『美術四季』第五十七号、東京都美術家協会発行、1973年。
- 7) 小林徳三郎「アトリエ」1930年11月号。
- 8) 東京文化財研究所総合検索「美術展覧会開催情報」データベース参照（<http://www.tobunken.go.jp/archives/>文化財関連情報の検索/美術展覧会開催情報/）。
- 9) 前掲註5。
- 10) 雑誌『みづゑ』が戦争中の出版統制のため、一時期『美術』と改題し発行されていたが、岩佐らが編集していた同名の雑誌とは別のものである。
- 11) 岩佐新「『美術新論』と『美術』の思い出」『本の手帖』9月号、1961年9月、p.320-322。
- 12) （座談会）隈元謙次郎、竹田道太郎、岩佐新「日本における近代美術館設立運動史の完結について」『現代の眼』93号、1962年8月。
- 13) 『日本美術年鑑』昭和12年版、美術研究所、1937年、p.132-133。
- 14) 岩佐新編「藤島武二先生のこと」『世界名画全集』（続巻第6 藤島武二、佐伯祐三）月報付録、平凡社、1961年11月。
- 15) 目次に「S.1生」と書かれた記事のなかに、本文末尾に「岩佐」と記載されているものがあり、それらが岩佐新のイニシャルである可能性は高いと思われる。
- 16) 岩佐新「藤島武二語録」『藤島武二画集』藤島武二画集刊行会、1943年11月。
- 17) 宮崎克己「石橋正二郎コレクション形成史—その2—終戦以後」『コレクター石橋正二郎展』図録、2002年、p.33-45。
- 18) 前掲註11。
- 19) 石橋正二郎「油絵の先駆者 藤島武二—努力と威厳の巨匠」『日本経済新聞』1967年4月30日。
- 20) 前掲註5。
- 21) 石橋正二郎「私の好きな作品—パブロ・ピカソの

-
- 女の顔」『アサヒグラフ』1962年6月29日。
- 22) 『美術新論』第4巻第2号、1929年4月。
- 23) 猪熊は、「私はとくに石橋さんの美術館が京橋に出来る前から可愛がって頂き、何かというとお宅に伺っていた。その頃、岩佐新氏がいて、同氏もブリヂストン美術館ができる前に蔭になって働かれた。すでに亡くなられたが大事な方だった」としている。(猪熊弦一郎「故石橋正二郎氏の訃に接して」『連盟ニュース』248号、日本美術家連盟、1976年、p.2。)
- 24) 前掲註5。
- 25) 小島直記『創業者・石橋正二郎—ブリヂストン経営の原点』新潮文庫、1996年、p.231-237。
- 26) 1966年4月からは運営委員となる。
- 27) 猪熊によれば、正二郎が「美術館が出来たときも、岩佐氏と僕にプランなどで随分相談された」という。(前掲註23。)
- 28) 『ブリヂストン美術館50年史』石橋財団ブリヂストン美術館、2003年、p.199。
- 29) 前掲註5。
- 30) 「主な記録」『ブリヂストン美術館館報』22号、ブリヂストン美術館、1973年、p.10

岩佐新略年譜

岩佐新に関する事項は、主に以下の文献を参照した。

岩佐新「石井さんの憶ひ出（林響氏追悼）」『アトリエ』第7巻4号、1930年4月、p.132-134。

岩佐新「『美術新論』と『美術』の思い出」『本の手帖』9月号、1961年9月、p.320-322。

伊原宇三郎「岩佐新さんを悼む」『連盟ニュース』224号、日本美術家連盟、1973年7月、p.2。

『島根県大百科事典』山陰中央新報社、1982年、p.160。

石橋正二郎に関する事項は、主に『コレクター石橋正二郎展』図録、石橋財団ブリヂストン美術館、2002年を参照した。

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | 岩佐新の生涯 | 関連事項 |
|------|-------------|----|--|---|
| 1894 | 明治27 | 0 | 7月10日、島根県能義郡（現在の安来市）伯太町井尻に生まれる。[島根県大百科事典] | |
| | | | 県立松江商業学校を卒業後、東京に出て美術記者として働く。[島根県大百科事典] | |
| 1914 | 大正3 | 20 | このころから、日本画家の石井天風（林響）に師事する。[アトリエ7-4] | |
| 1924 | 大正13 | 30 | | 斎藤与里ら、槐樹社を結成。 |
| 1925 | 大正14 | 31 | 石井林響が郷里に近い上総の大網に移り、次第に疎遠になる。[アトリエ7-4] その後、洋画に転向し本郷洋画研究所に学んだ。[連盟ニュース224] | |
| 1926 | 大正15 昭和元 | 32 | 11月、月刊美術雑誌『美術新論』が創刊、編集実務担当となる。[本の手帖] | |
| 1928 | 昭和3 | 34 | 第5回槐樹社展に一般出品者として油彩画《夜の静物》を出品。 | |
| 1929 | 昭和4 | 35 | 第6回槐樹社展に油彩画《広場風景》を出品。 藤島武二のアトリエを訪問し『美術新論』（4-12）にアトリエ訪問記を寄稿。 | |
| 1930 | 昭和5 | 36 | 第7回槐樹社展に油彩画《庭》を出品。 第11回帝展に《窓》を出品。 | 2月25日、石井林響、歿する。 |
| 1931 | 昭和6 | 37 | 第8回槐樹社展に油彩画《O氏像》を出品。 第12回帝展に《椅子に凭れるO氏像》を出品。 | 石橋正二郎、ブリヂストンタイヤ株式会社を設立。 |
| 1933 | 昭和8 | 39 | 11月、雑誌『美術新論』が11月号より『美術』と改題し、斎藤与里、熊岡美彦、岩佐が編集の中心となる。 | 槐樹社、解散。 |
| 1934 | 昭和9 | 40 | 画集『藤島武二画集』（東邦美術学院）を編集発行。 | |
| 1935 | 昭和10 | 41 | | 10月、正二郎、東京に移り、この頃から銀座の青樹社を訪れ、鈴木里一郎と懇意になる。 |
| 1936 | 昭和11 | 42 | | 正二郎、東京の麻布永坂町に自宅を建てる（松田建築事務所、主として平田重雄が設計）。 |
| 1938 | 昭和13 | 44 | 雑誌『美術』1月号より、岩佐個人が経営者として発行を引き受ける。[本の手帖] 12月、「藤島武二近作画展」（日本橋三越）の開催を世話する。 | 日本橋三越の藤島展で正二郎が《浪（大洗）》を気に入る。 |
| 1939 | 昭和14 | 45 | 5月、『美術』で石井林響供養号を発行する。 | 11月、銀座青樹社本店で「青木繁遺作展覧会」が開催される（翌年大阪支店でも開催）。 |

| 西暦 | 和暦 | 年齢 | 岩佐新の生涯 | 関連事項 |
|------|------|----|--|--|
| 1940 | 昭和15 | 46 | 画集『ポール・セザンヌ』(美術発行所)を刊行 11月23日-25日、「岩佐新「出雲」と「菊」の水墨 画展」(銀座・鳩居堂)開催。 | |
| 1941 | 昭和16 | 47 | 10月、青樹社の鈴木里一郎の声かけにより、雑誌 『国民美術』を創刊。[本の手帖] | |
| 1942 | 昭和17 | 48 | 2月、『国民美術』2月号をもって廃刊する。 藤島、正二郎、幹一郎とともに写真に写る。 4月26日-28日「岩佐新「采根譚」主題画展(日)」 (銀座・鳩居堂)開催。 | ブリヂストンタイヤの社名 を、日本タイヤ株式会社に変更。 |
| 1943 | 昭和18 | 49 | 10-11月、「藤島武二遺作展」を大阪市立美術館と 東京都美術館で開催。展覧会目録の後がきを執筆。 11月、『藤島武二画集』(藤島武二画集刊行会)を 編集発行。 | 3月19日、藤島武二、歿する。 |
| 1944 | 昭和19 | 50 | 日本タイヤに入社。島根に疎開し、島根新聞社(現 山陰中央新報社)に勤務。[島根県大百科事典] | |
| 1945 | 昭和20 | 51 | 12月、島根洋画展に出品。 | |
| 1946 | 昭和21 | 52 | 雑誌『島根美術』春号に寄稿。住所は能義井尻。 8月、島根洋画界夏季洋画講習会(松江)に、指 導者として参加。 | |
| 1947 | 昭和22 | 53 | 雑誌『島根美術』秋号に寄稿。 | |
| 1949 | 昭和24 | 55 | ふたたび東京へ上京する。[島根県大百科事典] | 日本美術家連盟が創立。 |
| 1950 | 昭和25 | 56 | この頃から、日本美術家連盟の主事(事務局)を 務める。[連盟ニュース224] | |
| 1951 | 昭和26 | 57 | ロックフェラー3世夫人、石橋正二郎の永坂自邸 を訪問。岩佐は案内役として同席。 | ブリヂストンタイヤ株式会社に 社名変更。ブリヂストンビル(本 社ビル)が竣工。 正二郎、自宅の敷地内に「美術 庫」を建てる。 |
| 1952 | 昭和27 | 58 | ブリヂストン美術館主事となる。 | 1月、ブリヂストン美術館が開館。 |
| 1953 | 昭和28 | 59 | ブリヂストン美術館映画委員会主事となる。委員 長は石橋幹一郎。 | |
| 1956 | 昭和31 | 62 | 石橋美術館運営委員となる(-70年3月)。 | 石橋正二郎、石橋財団を設立。 石橋美術館が開館。 |
| 1963 | 昭和38 | 69 | 石橋財団評議員となる(-72年11月)。 | |
| 1966 | 昭和41 | 72 | ブリヂストン美術館運営委員となる(-70年3月)。 | |
| 1967 | 昭和42 | 73 | ブリヂストン美術館参与に就任(-71年)。 | |
| 1973 | 昭和48 | | 6月20日、78歳で歿する。23日に増上寺にて美術 館葬がおこなわれた。 | |

岩佐新 主な関連文献

1. 岩佐新の著作・談話

【画集・展覧会カタログ】

岩佐新編『藤島武二画集』東邦美術学院、1934年11月

岩佐新編『ポール・セザンヌ』美術発行所、1940年

岩佐新『「茶人三十六歌撰」画帖 田能村竹田筆・岩瀬早雅伝賛』美術発行所、1941年

岩佐新「後がき」『藤島武二遺作展覧会目録』藤島武二遺作展覧会事務所、1943年10月

岩佐新「藤島武二語録」岩佐新、長谷川仁編『藤島武二画集』藤島武二画集刊行会、1943年11月

ブリヂストン美術館編『藤島武二（美術家シリーズ）第2』ブリヂストン美術館、1958年

岩佐新編「藤島武二語録」『世界名画全集』（続巻第6 藤島武二、佐伯祐三）平凡社、1961年11月

岩佐新「藤島武二先生のこと」『世界名画全集』（続巻第6 藤島武二、佐伯祐三）月報付録、平凡社、1961年11月

岩佐新「藤島武二語録」河北倫明・嘉門安雄編著『現代日本美術全集7』（青木繁、藤島武二）集英社、1972年

【雑誌・新聞】

「或る日の山手電車」『美術新論』第2巻第8号、1927年8月（挿絵）、p.87

「リノorium版画の話」『美術新論』第2巻第11号、1927年11月、p.183

※ 1生「アトリエ訪問 牧野虎雄氏」『美術新論』第2巻第11号

（※著者名がイニシャル表記されているが、岩佐新による記事である可能性が高い。以下同様。）

「マチスを訪れた人の話」『美術新論』第3巻第1号、1928年1月、p.66

「寫生地 地中海」『美術新論』第3巻第2号、1928年2月、p.66

※ S.1生「アトリエ訪問記 金山平三氏」『美術新論』第3巻第6号、1928年6月

「活字！車！」『美術新論』第3巻第7号、1928年7月

※ S.1生「アトリエ訪問記 片多徳郎氏」『美術新論』第3巻第7号

※ S.1生「アトリエ訪問記 安宅安五郎氏」『美術新論』第3巻第9号、1928年9月

※ S.1生「アトリエ訪問記 和田英作氏」『美術新論』第4巻第3号、1929年3月

「俵屋宗達に就て」『美術新論』第4巻第5号、1929年5月

「写生地 伊豆大島」『美術新論』第4巻第6号、1929年6月

※ S.1生「アトリエ訪問記 岡田三郎助」『美術新論』第4巻第6号、1929年6月

「一つのリング」『美術新論』第4巻第9号、1929年9月、p.85

※ S.1生「アトリエ訪問記 藤島武二」『美術新論』第4巻第12号、1929年12月、p.70-72

「石井さんの憶ひ出（林響氏追悼）」『アトリエ』第7巻第4号、1930年4月、p.132-134

「長原孝太郎先生」『美術新論』第6巻第1号、1931年1月、p.86

「石井林響遺作展」『アトリエ』第8巻第5号、1931年5月、p.126-129

「美術館長に問ふ」『美術新論』第6巻第5号、1931年5月、p.98

「おせつかいな次第ですが」『美術新論』第6巻第10号、1931年10月

「帝展幹事に献ず」『美術新論』第6巻第11号、1931年11月、p.168

「日本紹介」『美術新論』第7巻第7号、1932年7月、p.84

「浮世絵総合展見物」『美術新論』第7巻第7号、1932年7月、p.118

「朱葉会展」『美術新論』第8巻第4号、1933年4月

「巴里に於ける日本現代版畫準備展並に第三回日本版画協会展」『美術新論』第8巻第10号、美術新論社、1933年10月、p.23

「洋画といふ言葉は止め度い」『美術』第8巻第11号、1933年11月、p.96

「第四部審査員は何故辞任しなかったか」『美術』第9巻第11号、1934年11月、p.109

「博物館の古楽面展」『美術』第9巻第12号、1934年12月、p.52

「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第1号、1935年1月

「独立秋季展・川島理一郎熱河風物展・油絵5人」『美術』第10巻第1号、1935年1月

「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第2号、1935年2月

「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第4号、1935年4月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第5号、1935年5月
「編輯室」熊岡美彦、岩佐新『美術』第10巻第6号、1935年6月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第7号、1935年7月
「答 日本美術の変遷」『美術』第10巻第9号、1935年9月
「独逸から返つた嵯峨天皇宸影」『美術』第10巻第9号、1935年9月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第10巻第12号、1935年12月
「大東会展感想」『美術』第11巻第1号、1936年1月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第11巻第3号、1936年3月
「主線協会に呈す」『美術』第11巻第4号、1936年4月
「平生文相と大口氏の討議」『美術』第11巻第6号、1936年6月
「南画院と日本画会」『美術』第11巻第7号、1936年7月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第11巻第8号、1936年8月
「平生文相に抱負を聞く」『美術』第11巻第11号、1936年11月
「加筆事件」『美術』第11巻第11号、1936年11月
「弥次喜多文展見物」大川逞一、岩佐新『美術』第11巻第12号、1936年12月
「編輯室」熊岡美彦、岩佐新『美術』第11巻第12号、1936年12月
「大潮会展」『美術』第12巻第1号、1937年1月
「所謂公正会案に就て」『美術』第12巻第1号、1937年1月
「編輯室」熊岡美彦、斎藤与里、岩佐新『美術』第12巻第1号、1937年1月
「カメラのピクニック」『美術』第12巻第2号、1937年2月
「諸展覧会評」佐波・鈴木・岩佐『美術』第12巻第5号、1937年5月
「所感」『美術』第12巻第5号、1937年5月
「編輯室」渡辺、斎藤、岩佐『美術』第12巻第5号、1937年5月
「帝国芸術院」『美術』第12巻第7号、1937年7月
「富田溪仙遺作展」『美術』第12巻第7号、1937年7月
「文展」『美術』第12巻第8号、1937年8月
「現代美術館」『美術』第12巻第9号、1937年9月
「閻魔鏡」『美術』第12巻第9号、1937年9月
「鉄斎翁の全貌」『美術』第12巻第10号、1937年10月
「明治中期 東西画技の争ひ」『美術』第12巻第10号、1937年10月
「技術的区分鑑別に反対す」『美術』第12巻第11号、1937年11月
「文展に就いて石井柏亭氏との一問一答」『美術』第12巻第11号、1937年11月
「大潮会展」『美術』第13巻第1号、1938年1月
「諸展覧評」江川、岩佐『美術』第13巻第3号、1938年3月
「朝倉文夫氏訪問」『美術』第13巻第4号、1938年4月
「新美術人協会展」『美術』第13巻第7号、1938年7月
「石井林響像」『美術』第14巻第5号、1939年5月（挿絵）
「煌土社第五回展」『美術』第14巻第5号、1939年5月
「掲載の諸作品に就て」『美術』第15巻第1号、1940年1月
「一水会評」『造形芸術』第3巻第1号（第17号）1941年1月
「東京女学生美術展（展覧会評）」『塔影』第17巻第4号、1941年4月
「現代巨匠作品展（展覧会評）」『塔影』第17巻第4号、1941年7月
「美術界雑想」『エッチング』第112号、1942年5月
「文展第一部に拾ふ」『日本美術』第1巻第7号、1942年11月
「藤島武二作品回顧展に就いて」『みづゑ』第460号、1943年1月、p.42-43
「明治美術名作大展示会の油彩画」『日本美術』第2巻第3号、1943年3月
「藤島武二先生葬送雑記」『日本美術』第2巻第5号、1943年5月、p.60-61
「それでええんぢや（藤島武二氏追悼）」『画論』第21号、1943年5月、p.23-25

「藤島武二氏の作画過程」『画論』第22号、1943年6月、p.27-38
「藤島武二先生語録」『生活美術』第3巻第6号、1943年6月
「大観寸描」宇野浩二、金原省吾、岩佐新ほか『日本美術』第2巻第7号、1943年7月
「提案二三」『みづゑ』第468号、1943年9月
「日本画と洋画（決戦下大東亜美術樹立と日本画、洋画の問題）」『日本美術』第2巻第9号、1943年10月
「文展に絵を拾ふ」『日本美術』第2巻第10号、1943年11月
「藤島武二遺作展に就いて」『新美術』第28号、1943年11月、p.12-14
「藤島武二遺作展に就て」『みづゑ』第470号、1943年11月、p.42-43
「地方美術について」『島根美術』第1号、島根洋画会事務所、1946年
「絵を描くこと（初歩レアリズムについて）」『島根美術』第3号、1947年
「絵の売り方・買い方」『アトリエ』増刊1号、婦人画報社、1956年1月、p.95-97
「石井林響」『三彩』1957年10月、p.41-43
「[林間の歌]と[地中の歌]」『萌春』第48号、1957年11月
「多過ぎる美術団体」『美術館ニュース』第86号、東京都美術館友の会、1958年2月
「特集・高間惣地七 高間さんのこと」『造形』造形同人会、第4巻第9号、1958年12月
「ブリヂストン美術館」『国際文化』国際文化振興会、1959年9月
「[美術新論]と[美術]の思い出」『本の手帖』9月号、1961年9月、p.320-322
「天性の画人」『毎日新聞』1961年10月31日
「パリでのお帰帰展」『藝術新潮』第13巻7号、1962年7月、p.48-49
「油絵を洗う」『和歌山新聞』1962年9月5日
「絵を洗う」『伊勢新聞』1962年9月7日
「パリでのお化粧—アカを落とした石橋コレクション」『西日本新聞』1962年9月8日
「名画のよごれを洗う—絵具、画布など一枚一枚によって処置法違う」『北日本新聞』夕刊、1962年9月8日
「油絵を洗う技術」『信陽新聞』1962年9月12日
「随想にせもの」『東洋経済新報』4、1966年3月19日
「表紙解説」『三彩』三彩社、1967年6月、p.45
「生誕百年記念藤島武二展」『三彩』215号、1967年6月、p.44-45

【座談会】

「展覧会を中心とする座談会」石井柏亭、和田英作、田辺至、梅原龍三郎、熊岡美彦、山本鼎、安井曾太郎、牧野虎雄、藤島武二、有島生馬、斎藤与里、森田恒友、岩佐新、太田耕治『美術新論』第6巻第12号、1931年12月、p.4-43
「帝展洋画合評会」伊原宇三郎、伊藤廉、林俊衛、田口省吾、中村研一、鈴木千久馬、岩佐新『美術新論』第7巻第11号、1932年11月、p.12-30
「帝展座談（第二部を中心として）」石井柏亭、中山巖、熊岡美彦、荒城季夫、斎藤与里、広津和郎、岩佐新『美術』第9巻第11号、1934年11月、p.11,13-14
「東京府美術館十年記念展を中心とする座談会」橋本八百二、渡辺浩三、田中忠雄、中村節也、宮本三郎、岩佐新『美術』第10巻第5号、1935年5月、p.6-23
「美術批評に対する不満と希望」山下新太郎、石井柏亭、岩佐新ほか『アトリエ』第12巻第10号、1935年10月
「第二部会展を中心とする座談」中川紀元、児島喜久雄、荒城季夫、宮田重雄、岩佐新『美術』第10巻第11号、1935年11月、p.7-18
「文展はどんなものか 官展はどうあるべきか—昭和十四年三月十二日座談会」伊原宇三郎、石井柏亭、中野和高、内田巖、青山義雄、荒城季夫、斎藤与里、木村莊八、岩佐新『美術』第14巻第4号、1939年4月
「美術界安定方策座談会」青野季吉、荒城季夫、森田亀之助、森口多里、岩佐新（五十殿利治監修『美術批評家著作選集』第11巻、ゆまに書房、2011年所収）
「美術界新体制について設問に答ふ」木村莊八、海老原喜之助、岩佐新ほか『美之国』第16巻第11号、1940年11月、p.14-18
「ブリヂストン美術館の名作」『日展美術』8号、1960年1月、p.47-52
「座談会 日本における近代美術館設立運動史の完結について」隈元謙次郎、竹田道太郎、岩佐新『現代の眼』

93号、1962年8月

「坂崎坦氏—むかしがたり (座談会)-2-」岩佐新、藤本韶三『三彩』196号、三彩社、1966年2月、p.30

2. 岩佐新に関する文献

児島喜久雄「岩佐君に」『美術』第8巻第12号、1933年12月、p.15

本田芳子「岩佐新氏水墨画展 (展覧会評)」『塔影』第17巻第1号、1941年1月、p.124

伊原宇三郎「岩佐新さんを悼む」『連盟ニュース』224号、1973年7月、p.2

猪熊弦一郎「故石橋正二郎氏の訃に接して」『連盟ニュース』248号、日本美術家連盟、1976年、p.2

田中日佐夫『美術品移動史—近代日本のコレクターたち』日本経済新聞社、1981年、p.268-269

『島根県大百科事典』山陰中央新報社、1982年、p.160

小島直記『創業者・石橋正二郎—プリヂストン経営の原点』新潮文庫、1996年、p.231-237

植野健造「石橋正二郎コレクション形成史—その1—草創期から終戦まで」『コレクター石橋正二郎』展図録、プリヂストン美術館、2002年、p.29

宮崎克己「石橋正二郎コレクション形成史—その2—草創期から終戦まで」『コレクター石橋正二郎』展図録、プリヂストン美術館、2002年、p.40

画集・展覧会カタログを除き、該当箇所を確認できたものには末尾に頁番号を記載した。